

12 言語獲得装置

母語の習得は胎児のときから既に始まっているとも言われているが、健康な子どもであれば学童期を迎える5～6歳になる頃には母語とその運用を可能にする複雑な言語知識を習得すると考えられている。なぜ子どもは言語使用を可能にする複雑な言語知識を比較的短期間のうちに特別な指導を受けたり学習したりすることなく習得することができるのであろうか。

1940～50年代、特にアメリカで影響力のあった初期の言語習得理論はBurrhus Frederic Skinnerらによって提唱された**行動主義 (behaviorism)**という心理学のアプローチに基づくものである。行動主義では、言語学習とは、「模倣」や「練習」を通して、正しい言語使用の「習慣」を形成していくことである。例えば、子どもが耳にしたことばを正しく模倣すると、母親など周囲の人に褒めてもらえるかもしれない。このような周囲からの賞賛は「正の強化 (positive reinforcement)」の役目を果たし、子どもの正しいことばの模倣と練習を促進し、その結果、正しい言語使用の「習慣」が形成される。このような言語学習を通して、言語は発達し獲得されと考えられた。行動主義の言語習得理論では、子どもが習得することになるすべての言語知識は環境からもたらされることになる。その意味で、子どもが耳にする言語の質や量、周囲の他者から受ける「正の強化」の程度など、子どもを取り巻く環境が言語習得のメカニズムの中心に位置し、極めて重要な役目を果たしているといえる。

理論言語学者のNoam Chomskyは、環境、特に耳からのインプット（周囲の人から受け取る言語情報）を主な拠りどころとして子どもが言語を獲得すると考える行動主義の理論に異議を唱えた。Chomskyは子どもが周囲から受信するインプットの質や量は、子どもが最終的に身につける複雑で高度な言語知識を獲得するためには不十分であると主張し、これを「**刺激の貧困 (poverty of stimulus)**」と呼んだ。子どもが耳にする言葉は常に完全であるわけではなく、言い間違いを含むこともそれほど珍しいことではない。また、子どもが聞き間違いや言い間違いをしたとしても常に周囲の人に指摘されるわけでもない。更に、子どもが受信するインプットの質や量はひとりひとり異なっている。それに関わらず、どの子どもも文法的に正しい文を身につけ、正しい文とそうでない文（非文）を識別できるようになる。Chomskyはこのような刺激の貧困にも関わらず子どもが言語を習得できるのは、言語の習得を可能にする何らかの特別な機能が生得的に備わっているからだと主張した。Chomskyの言語習得理論では、言語は学習によって後天

的に習得されるものではなく、生得的なプログラムの働きによって本能的に習得されると考えられている。その意味で子どもを取り巻く環境の役割はあまり重要ではない。インプットは言語の習得を誘引する「引き金」でしかなく、子どもに話しかける他者が存在すればインプットの質や量に関わりなく言語は自然に習得される。

Chomskyは人間の脳に生得的に備わっている言語習得の機能を「**言語獲得装置 (Language Acquisition Device: LAD)**」と呼んだ。この装置には、どのような言語にも共通する文を生成するための普遍的な原理が内蔵されているとされ、これを「**普遍文法 (Universal Grammar: UG)**」と呼ぶ。普遍文法は全ての自然言語（コミュニケーションの道具として自然に発展してきた言語）に共通する「普遍原理」と、個別言語（英語や日本語などの1つ1つの言語）に対応するための「パラメータ」からなるとされる。普遍原理は言語を産出するための規則や原理の集合であり、全ての言語の礎のようなものである。人がどの国に生まれたとしてもその国で話されているどんな言語でも母語として習得できるのは、言語の原理が個別言語ごとに存在するからではなく、普遍的なものだからだと考えられている。ある言語を母語として習得する子どもの場合、母親や周囲の他者からその言語の言語データを受信し、それを元にその言語の個別言語のパラメータが設定され、その言語が母語として習得される。このような言語習得理論は「**原理とパラメータのアプローチ (principles and parameters approach)**」と呼ばれている。

Chomskyの考える言語獲得装置は、人間の脳に生得的に備わった言語に特化した特別なメカニズムであり、他の認知機能とは明確に区別される。しかし、Michael Tomaselloらの認知心理学者の中には、言語獲得装置のような言語だけに特化した特別な機能に頼らなくても、人間に備わっている一般認知能力によって言語を習得することは可能であるとする研究者もいる。また、子どもが受信するデータは、言語情報だけでなく、ジェスチャーや表情などの非言語的情報も含まれ、言語能力を発達させる上で十分豊かであると考えられている。その意味で、周囲の人とのコミュニケーションを通してもたらされる言語・非言語のインプット（言語情報）は、言語獲得装置を起動させるための単なる「引き金」ではなく、言語を習得するための極めて重要な分析材料である。この立場では、環境、特に周囲とのインターアクションは言語を習得する上で極めて重要な役割を果たしているといえる。

(渋谷 和郎)